

東畑精一・高橋泰蔵 監修

わが国金融市場の形成

— 日本金融市場発達史 III —

金融経済研究所 編

金融経済研究所叢書 4

東洋経済新報社

わが国金融市場の形成

— 日本金融市場発達史 Ⅲ —

東 畑 精 一 監修
高 橋 泰 蔵
金融経済研究所 編

金融経済研究所叢書

4

東洋経済新報社

金融経済研究所叢書 4

わが国金融市場の形成——日本金融市場発達史Ⅲ—— 定価 4300 円

昭和55年 4 月 3 日 発行

編 者 金融経済研究所

発行者 中 井 義 行

発行所 東京都中央区日本橋本石町 1 の 4 東洋経済新報社

郵便番号 103 電話03(270)4111(大代表) 振替口座東京3-6518

© 1980 <検印省略> 落丁・落丁本はお取替えいたします。 3033-6707-5214
Printed in Japan

「金融経済研究所叢書」の刊行によせて

金融経済研究所は、今日まで多数の研究者を育て、これを社会に送り出してきた。その大多数は現在学界にあって活躍している。これらの旧所員と現所員との間に協力が行なわれて研究をつづけていくことは、本研究所発足以来の念願であった。幸いにして、その機運も熟し、昨年九月に若手の旧所員有志と現所員との間に「金融研究会」が結成され、「内外の金融問題を研究・調査し、今後におけるわが国の金融制度および金融政策のあり方を検討する」ととなった。発足以来、毎月少なくとも一回の研究会を開き、会員相互の自由な発言と遠慮のない批判とによって、着々とその目的とするところに接近しつつある。その成果のあるものは研究所の定期刊行物である『金融経済』に公表されつつあるし、今後もしそう然りであろう。

なお、右の『金融経済』の刊行と併行して、本研究所の企画による研究・調査の成果と、翻訳書を、今後「金融経済研究所叢書」として、続次刊行することとなった。これについては、「金融研究会」の会員の強い協力にあわせて、財団法人金融経済研究所の財政的援助と、出版社東洋経済新報社の好意によるものである。事情を記して、広く金融経済界の理解と支援を望むものである。

一九六四（昭和三九）年六月

監修者のことば

この「日本金融市場発達史」を本研究所の共同研究の課題として提案したのは、理事東畑精一であり、その間、研究員に若干の異動があったが、これらの人々によってこの課題の研究が続けられてきた。この度その成果を「金融経済研究所叢書」の一部として、東洋経済新報社から刊行することについては、理事高橋泰蔵がその衝に当たった。

このようにして、この研究は本研究所の元、現研究員の手によるものであるが、この間、法政大学渡辺佐平教授にその全般的な研究指導、編集を委嘱し、また元研究員、現専修大学教授今田治弥氏ならびに研究員岡田和喜氏の両氏に刊行に当たったの具体的な編集事務を委嘱した。この機会に、上記諸氏の労に対して感謝の意を表するものである。

監修者としてこの機会に、本研究企画の意図について、述べておくのが適当と考える。明治期以来の日本経済の発展と、その機構については、これまで、それは資本主義への移行であるとして見られ、またその見方についても幾多の論争が行なわれてきた。しかし、その多くは資本主義という単純な公式によって、これを解明しようとしたものであるが、同じく資本主義経済といっても、時代を異にし、国情を異にすることによってその現われの仕方に異なるものがあり、この意味から、いっそう基礎的、具体的にその現われの仕方を捉えることが必要であると考える。経済は生きものであり、諸々の個体、企業の営まれ方に、むしろその真の姿があり、基礎を見出しうると考えるからである。本研究の目的とするところは、日本の資本主義経済を發展せしめてきた一つの重要な側面として金融市場の發展

を明らかにすることにある。そのためには、いわゆる公式論をもってする以前に、より具体的な研究を必要とするところを考へる。本「叢書」に収めるところの諸研究において、近來いわゆるマクロ的研究の方法によらず、地域的な研究、あるいは特定産業との関連における特殊研究、具体的事例研究に重点がおかれたのは、このような理由、考え方によるものである。これらの研究が、日本経済全体としての生き方、発展の仕方を明らかにするための基礎として役立ちうれば幸いである。

本研究は、一応、明治、大正時より昭和初期までを対象とし、三巻をもってひとまず完了することとなっており、いわば第一次の研究成果である。日本金融史の研究は、近來いよいよその重要性を加えつつあり、第二次世界大戦勃発前後から戦後にかけての根本資料は、現に着々と整理、刊行せられつつある。これら資料の集成をまっして、元、現研究員より成る「金融研究会」会員によって、あらためて第二次、第三次の研究の計画が考慮せられることを期待するものである。

なお、共同研究の成果を本「叢書」の形により刊行することを快諾された東洋経済新報社に対し感謝の意を表するものである。

昭和四〇年十一月

東 畑 精 一
高 橋 泰 蔵

編集者のことば

本書『わが国金融市場の形成』は『日本金融市場発達史』の第三巻にあたる。第一巻『明治前期の銀行制度』、第二巻『日本の銀行制度確立史』はそれぞれ昭和四〇年一月、四一年七月とあいっいで刊行されている。第三巻の刊行までに実に一四年もの歳月を要したことになる。その理由はともかくとして、かかる遅延に対し弁明の言葉を知らない。何はともあれまず関係各位に深くお詫びを申し上げる。

『日本金融市場発達史』は全三巻をもって構成され、時期的には明治期から昭和初期までを研究対象とするものであった。したがって本第三巻は、前二巻をうけて主に大正期から昭和初期の金融市場形成史を担当することになった。この時期は、明治初頭以来の上からの近代化政策によって資本制生産様式が急ピッチで導入され、東洋の一角にはじめて姿を現わした産業国家が、世界史的な帝国主義的競争の渦中にあって、早熟帝国主義国家として列強の一つに数えられる地位を国際的に確立した時期であった。しかし、この間に第一次大戦という一大好機に乗じて、わが国は第一部門の充実を中心として躍進を遂げるのであったが、戦後は世界的活況の波に乗りえず、急成長に内包された脆弱性を露呈しつつ世界大恐慌の嵐に巻き込まれることになった。そして、この有為転変のなかで、資本集中は急速に進行し、日本的金融資本Ⅱ財閥の支配体制の確立をみたのである。金融市場Ⅱ制度がこうした状況のなかであ

呼応して再編整備されていたことはいうまでもない。

本書の狙いはこの再編整備の歴史的過程を審かにするにあった。そのため、めまぐるしく変転する金融情勢に対処した金融政策、金融資本と財閥の支配体制形成および確立における金融機関の演じた役割と再編、およびこの間に重大問題化した弱小資本の金融問題、以上三つの課題を設定した。それぞれについては、すでにこれまで多くの人が直接間接に取り上げており、論攻も枚挙にいとまのないほど多い。それだけに新発見は至難の業だということは十分承知して取り組んだ次第である。なお、各課題は、必ずしも前二巻に対応するものがないため、研究対象の時期として設定されたところをはみ出し、過去に遡及せざるをえなかった。

第一編「日本銀行公定歩合制度・政策の推移」では、日本銀行発足当初から大正六年の金本位離脱時点までの公定歩合操作の歴史が三つの時期区分のもとでたんねんにフォローされている。公定歩合操作は、公開市場操作および支払準備率操作とともに正統的金融政策手段の一つであるが、他二者に比べその歴史は古く、本編の研究対象期間においては唯一の中央銀行金融調整手段であった。したがって、公定歩合操作の歴史は、金融政策の歴史そのものといえてよい。

教科書流にいうと、古典的金（銀）本位制のもとでは中央銀行の主たる責務は兌換制の擁護にあり、対外均衡が対内均衡より重要視されていた。しかし、わが国の場合後発資本主義国であり、かつまた不換紙幣の整理、インフレーション収束を当面の目的とする中央銀行制度の導入であり、しかも銀兌換制を採用せざるをえず、国際金本位制度の枠組のなかに参入したのは明治三〇年になってからであった。また金本位制に切り替えたといっても、ポンド体制の周辺に位置したにすぎず、対外均衡重視に傾斜したものの、対内均衡を軽視しないしは無視するにはあまりにもわが国経済はひ弱であった。かつまた二度も大きな戦争に直面しなければならず、かかる不安定的要素は、金融当局をして

きわめて困難にして複雑なる配慮のもとに政策を実施せしめているのである。本研究は、日本銀行の諸資料に直接あたり、些細に政策実施の背後事情を解説している。

第二編「わが国における独占形成と金融機構」は、財閥にとってそのかかえる銀行等金融機関はいかなる意味をもつ存在であったかを中心テーマとしている。そしてこの問題を考察するさい常に念頭におかれたのは「金融資本」の概念であった。周知のように、わが国の近代化過程は原蓄と産業化、資本制確立と独占形成が重合しつつ進行し、銀行業の発達が商・工業のそれに先行するという特異事情があった。加えて、農村はいうに及ばず、近代組織のなかにさえも、封建的残滓は温存されたままで独占段階に突入するのである。日本型金融資本である財閥が、その日本的特異性を云々される重大なる理由の一つはその前近代的体質にあったといえよう。本研究は、この点を重視し、上記の課題を財閥の特異体質にかかわらしめて考察している。

第三編「中小企業金融」は、わが国経済構造の底辺を形成する群小の中小企業金融を取り扱う予定であった。わが国の経済構造は、欧米にはみられない特殊の二重構造をもつといわれている。いずれの国をみても大企業あり、中企業ありそして小企業がある。にもかかわらず、特殊的構造をもつといわれるのは、中小の企業がたんに規模が小さいというだけではなく、大企業に対し特別の地位におかれているからである。そして、かかる二重構造は、したがって、それらは近代的金融機構の取引対象圏外におかれ、前期的な金融の仕組によって支えられざるをえなかった。しかし、国民的再生産体系のなかに位置づけられるようになると、その存亡は体制的問題となり、その金融に対しても何らかの政策的・制度的対応が必要となってきた。本編はその性質上古い時代にまで遡らざるをえなかったが、そのため、対象時期にまでくだったて論及することができなかった。続編はいずれ筆者の手により発表されるであろう。

第四編「台湾銀行の一断面」は、本卷対象期間中における、金融界のみならず経済界の最大といつてよい大事件を

扱ったものである。第一次大戦は、わが国経済が飛躍的な発展を遂げる一大好機であり、帝国主義国家としての基盤がそこに整えられた。澎湃たる企業熱のなかで有数企業の登場をみたのであるが、戦後反動はそれら新興資本の多くに生存を許さず、すでにその威容を着々と整えつつあった財閥支配体制を一挙に確立させたのである。国家的特殊銀行である台湾銀行ですら、この流れのなかで新興大資本の没落を阻止することはできなかったのである。

なお、第二編は本巻のために準備され、そして『金融経済』に三回に分けて掲載された論文を加筆訂正したものであり、第四編は同じく『金融経済』に掲載された同名論文の転載である。

本巻の執筆者はつぎのとおりである。

第一編 泉川 節（金融経済研究所研究員）

第二編 森垣 淑（元研究員、拓殖大学教授）

第三編 三輪悌三（元研究員、関東学園大学教授）

第四編 今田治弥（元研究員、専修大学教授）

昭和五四年一二月

渡 辺 佐 平
森 垣 淑

目次

「金融経済研究所叢書」の刊行によせて……………	i
監修者のことば……………	iii
編集者のことば……………	v
 第一編 日本銀行公定歩合制度・政策の推移……………	 1
はじめに……………	3
一 明治以降のわが国の貨幣制度の変遷……………	3
二 本稿の課題……………	7
 第一章 日本銀行公定歩合の推移（開業後明治一七年末までの時期）……………	 12
一 公定歩合の形式ならびに決定方式……………	12
公定歩合の形式……………	12
公定歩合の決定方式……………	13

二	この期間における公定歩合の変更	15
第二章	銀本位制度実施の時期（明治一八～二九年）	21
一	公定歩合の形式ならびに決定方式の変更	21
	公定歩合の形式の変更	21
	公定歩合の決定方式の変更	22
二	この期間における公定歩合の変更	22
第三章	金本位制度実施の時期（明治三〇年～大正六年）	44
一	公定歩合の形式の変更と日本銀行公定歩合の全国一率化	44
	公定歩合の形式の変更	44
	日本銀行公定歩合の全国一率化	47
二	この期間における公定歩合の変更	48
	若干のまとめ	101
第二編	わが国における独占形成と金融機構	113
	森垣 淑	
第一章	特殊資本主義の定着	115
一	日本資本主義の特異体質	115
二	資本主義定着期の金融構造	124

普通銀行	125
産業金融専門銀行	127
資本市場	128
三 資本主義定着期の金融市場の特質とその理由	132
普通銀行の圧倒的地位と特異性	133
縦断的資金圏の形成	135
第二章 経済の急転回と金融機構の矛盾発現	141
一 第一次大戦を契機とする経済の変貌	141
重化学工業化の進展	142
国内の矛盾増大	144
二 戦後の慢性的不況	146
三 第一次大戦後の金融界の変貌	150
わが国金融ポジションの激変	150
普通銀行業界の動揺	152
勸・興銀の救済機関化	156
証券（資本）市場の発展	157
信託会社	158
四 銀行業の本質的矛盾とその解決	163
とくに普銀にみられた矛盾	163

問題の打開	165
第三章 金融資本の完成	172
一 資本構造の変化	172
権力構造の変化	172
諸資本の勢力消長	177
二 財閥の支配組織	181
三 財閥と銀行	188
財閥の金融支配力	188
財閥における銀行の地位と役割	192
第三編 中小企業金融	207
――問屋制前貸――	207
三輪 悌三	207
序論	209
古代国家	211
中世	212
近世	214
第一章 明治維新から二〇年前後まで	224
一 ことわり	224

前期	224
後期	225
二期	226
明治初期の経済状態	226
株仲間の解散	232
幕末開港（二八五八年）による影響	234
三期——松方デフレーションと在来工業	251
第二章 金融制度	258
一期	258
二期	269
第四編 台湾銀行の一断面	273
——鈴木商店との関係——	
一期	275
二期	278
三期	284
監修者あとがき	294

第一編

日本銀行公定歩合制度・政策の推移

